わ が 街 わ が 故 郷

株式会社天辻鋼球製作所
名古屋支店とその周辺

株式会社天辻鋼球製作所　名古屋支店
所 在 地：〒456-0002
名古屋市熱田区金山町
1丁目19番22号
電話番号：052-682-7447

弊社は1920年（大正９年）８月に創業しました。現在の大阪市淀川区に事務所と工場を開設、国産鋼球専門メーカーの第一号として自転車用の炭素鋼球の生産を開始しました。

その後、1933年（昭和８年）12月20日に株式会社となり、1937年（昭和12年）12月から軸受用鋼球の本格生産を始めました。

名古屋支店は1955年（昭和30年）、東京に次ぐ第２の営業拠点として名古屋市中区袋町に開設されました。（当時は名古屋出張所）

その後、1984年（昭和59年）に現在の場所に移り、2000年（平成12年）名古屋支店となり、現在に至ります。

今回は当支店の周辺について紹介致します。

まずは、熱田区の象徴ともいえる「熱田神宮」について紹介致します。

「熱田」の名は日本書紀に記述されている尾張国吾湯市（あゆち）村が語源となっている説が有力です。熱田神宮は、三種の神器のひとつである草薙神剣（くさなぎのみつるぎ）が鎮座したことにはじまり、それは２世紀はじめのことといわれています。境内には樹齢千年を越える木々が覆い茂り神話の森として、伊勢神宮に次ぐお宮として親しまれ、年間800万人以上の参拝客が訪れます。

熱田神宮

熱田神宮の歴史は、三種の神器のひとつである「草薙神剣」を祀ったことに始まります。草薙の剣は素戔嗚尊（すさのおのみこと）が八岐大蛇（やまたのおろち）を退治したときにその尾から出たといわれる剣で、最初は臭蛇（くさなぎ）の剣だったものが、第12代景行天皇の子、日本武尊（やまとたけるのみこと）が焼津の野で草を薙ぎ払ったことから草薙の剣となったとされています。

日本武尊は東国の神々を平定すると、結婚の約束をしていた尾張国造の娘である宮簀媛命（みやすひめのみこと）を尾張氏の里・火上山

（緑区大高町）で妃としました。その後、日本武尊は伊吹山の神を鎮めに向かうのですが、草薙の剣は宮簀媛命のもとに置いて行きます。日本武尊は伊吹山の神に負け負傷し伊勢の国で命を落とします。それを知った宮簀媛命は、悲しみのなか草薙の剣をここ熱田に祀ったのでした。それが景行天皇の末年頃といわれていますので西暦130年頃のことです。

以来約1900年にわたり、熱田神宮は伊勢神宮に次ぐ尊いお宮として厚い信仰を集め、「熱田さま」「熱田さん」「宮の熱田」と呼ばれ親しまれてきました。

熱田神宮以外にも、熱田区には、熱田神宮公園、白鳥公園（しらとり）と公園が多く、その中に古墳跡などの歴史を感じるものがたくさんあります。

熱田神宮の北西に位置する熱田神宮公園には、断夫山古墳（だんぷざん）があります。東海地方最大の前方後円墳で6世紀初頭の築造、1987年（昭和62年）に国の史跡に指定されています。その規模は、全長151m、前方部の幅116m、後円部の直径80m、前方部の高さ16.2m、後円部の高さ13mです。後円部は台状で三段に築かれたと見られており、二段目の傾斜面に円筒埴輪を巡らせたつくりになっていたと考えられています。

また、前方部と後円部の間に「造り出し」と呼ばれる方形の壇がつくられており、須恵器（すえき）なども発見されたことから、ここで祭事が行われていたと考えられています。古墳の周囲には石垣で組まれた周濠が巡らされていますが、現在のものは第二次世界大戦後につくられたもので、かつてどのような構造・規模であったのかは不明です。

いまでは全域が樹木に覆われ、周囲からその全景を見渡すことは難しくなっております。伝承では、日本武尊の妻、宮簀媛命の墓といわれています。断夫山の名は、日本武尊の死後、宮簀媛命が再婚しなかったことから名づけられました。

断夫山古墳

また、断夫山古墳から南に住宅地を歩いていくと白鳥公園があります。白鳥公園には、御陵にふさわしい石柱で周囲が囲まれている白鳥古墳があります。

白鳥古墳は、断夫山古墳とともに6世紀初頭に築造された前方後円墳です。全長74m、最大幅25mとされていますが、方墳の前部と円墳の東部分が削り取られており、もともとの形を留めておりません。

『尾張名所図会』には、1837年（天保8年）の台風の際に陵上の樹が倒されて内部の石室が露出し、直刀や鉄鉾などが発見されたことが記されています。

日本武尊が、死後、白鳥となって舞い降りた地と伝えられることから日本武尊の陵墓とされています。

石段の下には本居宣長の歌碑があります。

「しきしまのやまとこひしみ白鳥のかけりいましししあとところけれ」

本居宣長の歌碑

このように、熱田区には、古墳跡などの歴史も数多くあるのですが、忘れてはならないのが、名古屋名物「ひつまぶし」です。

熱田神宮の南側に蓬莱陣屋と呼ばれる「あつた蓬莱軒本店」があります。蓬莱軒といえば「ひつまぶし」。備長炭で焼き上げたうなぎを独特のタレで味をつけ短冊状に切ります。そしてご飯とタレとともに小さなおひつに盛り付けられます。しかしそのままおひつから食べるわけではなく、ひつまぶしには作法があります。おひつの蓋を開けたらしゃもじで十字に線を入れ四分割し、一区画ずつを茶碗にとって食べます。１杯目はそのままの味を楽しみます。２杯目はネギ、わさびなど薬味を入れて、３杯目は薬味にだし汁をかけていただきます。そして４杯目はその３つの食べ方のうちベストだった食べ方で食べます。一般的なうな重やうな丼とは味も異なり、うなぎの蒲焼は苦手でもひつまぶしは好物という人も結構います。

ひつまぶし

蓬莱とは熱田の別名で、神々が住み、不老長寿の薬があるという中国の蓬莱島伝説の地が熱田であるという言い伝えから古くからそう呼ばれていました。蓬莱の陣屋跡にあることから蓬莱陣屋と、あつた蓬莱軒の本店は名乗っています。ちなみに「あつた蓬莱軒」は1873年(明治６年)創業です。そして「ひつまぶし」は「あつた蓬莱軒」の登録商標なので、他の店は「ひつまぶし」と名乗ってはいけません。そのため「ひつまむし」と苦肉の策を練っているお店もあります。

女将の名古屋弁も有名です。蓬莱陣屋はいつも大変混んでおり、しかも注文があってからうなぎを焼くので、かなりの時間がかかります。仕事中のランチに立ち寄るとハマる可能性が高いので気をつけたいところ。ちなみにすぐ近くの熱田神宮南にも神宮南門店を構えていますし、栄の松坂屋にも出店していてそちらの方が比較的空いています。それでもやはりこの本店で食べたいという人は多く、いつも駐車場が空くのを待ち、さらに席が空くのを待つ行列ができています。

ひつまぶしは食べるまでに時間がかかるので、良い「暇つぶし」になるというわけです。

皆様も名古屋にお越しの際は是非味見をしてはいかがでしょうか。

(株式会社 天辻鋼球製作所
名古屋支店　岸下 幸平)